



③ 校長はいつも元気で愉快だ（2013年6月）



④ 市教委もとりくみを評価した（2013年）

# 北欧Ⅱ 幸せのものさし

障害者権利条約のいきる町で

第5回 フィンランド・オーロラ学校  
インクルーシブ教育の課題

文・写真 蘭部英夫

全国障害者問題研究会事務局長

フィンランドの教育は、日本の教育基準法（改悪前）に学び、①教育機会の平等（無料、障害者含めだれでもどこで）、②現場への裁量権委譲、③学ぶ意欲を大切にすることを徹底している。

「フィンランドの現実は、わが国の子どもたちが置かれている今を変える方向性とその正当性をあらためて教えてくれる」と弘前大学の安藤房治さんが言つた。

「ダウン症児らと健常児が一緒にクラスで学ぶインクルーシブ教育が前年からはじまつた」と聞いて、エスボーリー市にあるオーロラ学校を訪問したのは2007年1月のこと。彼らは当時2年生（写真2）。こうしたクラスは、「グループ・インテグレーション」と言われ、自治体でも実施は2校目で、「めずらしい」とりくみとのことだった。

音楽と演劇、パソコンが大好きだという52歳の校長は、全校集会でエレキギターを弾き、メインボーカルの若い教師・ハンナ（このクラス担任）たちとともに登場した。

それから2度、彼らの授業を参観させ

てもらうなど交流を続けてきた。

体毎に学級定数を決めるそうだ。

彼らが5年生と6年生（写真1）の年に参観したのは「シアター」（演劇）授業だった。

手厚い体制（演劇教育が得意の教師と障害児担当の副校长のベテラン2人）のなかで、「幅広い発達段階の子どもを受け入れる許容範囲の広い授業」が行われ、学級集団の中で「障害のある子ども4人が受け入れられている」と品川文雄（）本社の近代的なビル群が見えるところはもうエスボーリー市（人口25万人）だ。

「やあ、やあ、やあ、よーおこし」。そんな感じの話しぶりで顔なじみのヘルストローム校長が首からたくさん鍵をぶら下げてやってきた（写真3）。

オーロラは、フィンランドではめずらしくなった小学校のみの古い学校で、356名が16のクラスで学んでいる。現在、知的障害のある子が3名、視覚障害のある子が1名。教師は24名+アシスタント4名+インクルーシブ教育担当1名。1クラスはこれまで、低学年24名、3~6年生が32名だったが、今後は自治

○大事なことは教員の確保だ。学校全体も理解し合う雰囲気を大切にした。

○しかし、中学校に進学した彼らは、この1年なかなか大変だった。中学は教科担任制だから、先生が授業毎に変わる。

どうしても落ち着かない。学習内容も難しくなる。特別学級を基礎に交流をつづけるなど改善課題は多い。



① 6年生のシアター授業（2010年9月）



② 当時2年生のクラス風景（2007年1月）

○インクルーシブ教育に10年とりくんでいる。1クラスに4人の知的障害児が一緒に学ぶ。フィンランドでもはじめてのことだ。

○親の要望からはじまつたが、目的は「クラスに仲間がいる」という考え方だ。○2クラスを一つの大クラスとして運営したが、よく機能し、よい結果を得た。

○教師2名とアシスタント2名の体制で、6年間クラスも担任も変えなかった。

■障害者権利条約第24条 教育  
2（e）学問的及び社会的な発達を最大にする環境において、完全な包容という目標に合致する効果的で個別化された支援措置がとられること。